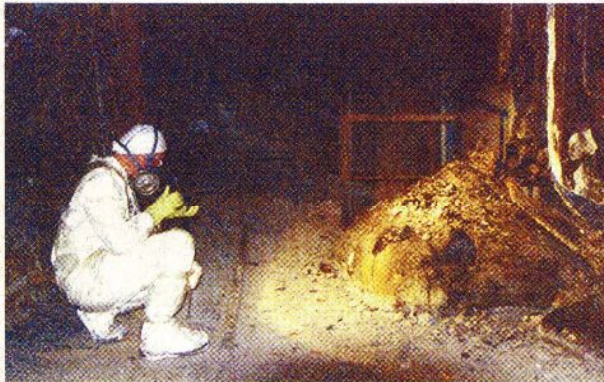


低線量被曝 白血病リスク

チェルノ作業員11万人 20年追跡で確認

【ワシントン共同】チェルノブイリ原発事故の収束作業に関わった作業員約11万人を20年間にわたって追跡調査した結果、低線量の被曝でも血液がんの一種である白血病の発症リスクが高まるとの研究結果を、米国立がん研究所や米カリフォルニア大サンフランシスコ校のチームが米専門誌に8日発表した。発症者の半数以上は進行が緩やかな慢性リンパ性白血病だったが、中には急性白血病の人もいた。

米研究「19人影響で発症」



チェルノブイリ原発事故で溶けた核燃料やコンクリート、鋼鉄が混じり合った「家の足」と呼ばれる塊の近くで放射線測定をする作業員。1996年4月。(ロイター共同)

調査は事故発生から986年から90年までに主に積算で200ミリシーベルト未満の比較的低線量に被曝した人を対象にした。うち約8割は1986年から90年までに137人が白血病に罹患した。統計学的理由で事前に20人を除き、19人が被曝の影響と結論



クリティック
慢性リンパ性白血病血液や骨髄にある白血球の一種であるリンパ球が緩やかに増殖し続ける病状。進行が遅いため自覚症状が少なく、治療が不要な場合が多いが、症状が重くなる。

リンパ節が腫れて疲れやすくなったり、免疫力が低下して感染症にかかりやすくなった。欧米人に多いが日本人では少なく、遺伝的な要因があると考えられている。

(ワシントン共同)

7人についてほかの発症要因を除外する分析を行った。その結果、約16%に当たる19人が被曝の影響で白血病を発症したと結論付けた。

白血病になった137人は、事故後原発から30キロ以内で緊急対応に当たった人や軍人、原発の専門家だった。放射線による発がんの危険性は100ミリシーベルトを下回る被曝では、他の影響に隠れてしまい証明が難しいが、これまでも微量で持続的な被曝によるリスクの指摘はあった。これまで

日本 実態把握を
原子力資料情報室の原井正子さんの話。日本場合は、核施設で働く労働者の本場の状況が分かっていない。労働者が労災申請を出す例が少ないのは、被曝がないということではなく、原子力労働者の風土で不都合なことと言えない人がほとんどだったのではないかと指摘はあった。

か。福島第1原発事故の後、(線量計を鉛カバリーで覆うなど)被曝を隠す動きがある。その意味で今回の米国のデータは示唆に富み、日本もきちんと実態を把握しなければならぬ。

詳細データ必要
京都医療科学大の速藤啓吾学長(放射線医学)の話。これまでの

復興予算など
3分野審査へ
政府事業仕分け

政府の行政刷新会議(議長・野田佳彦首相)は8日の会合で、東日本大震災の復興予算、経済成長に向けた「日本再生戦略」の重点項目、社会保障の3分野

研究では、チェルノブイリ原発事故の除染に加わった作業員のうち、積算で1200ミリシーベルト以上の被曝で白血病が増えたとのデータがある。今回の調査結果は、長期的に追跡することの大切さを示すもので重要な知見だが、どの程度の線量で発症したのか、それぞれのデータを詳しく確認する必要がある。